

④^回

中央大学創立125周年プレ企画

理工学部シンポジウム&パネル展開く

「宇宙から見た地球」

地球環境の中の水、水と生命

シリーズ

「創立125周年に向けて」

中央大学創立125周年を記念する理工学部シンポジウム&パネル展（主催…理工学部）が10月10日、「宇宙から見た地球、地球環境の中の水、水と生命」をテーマに、東京文京区の文京シビックセンターで開かれた。シンポジウム会場の大ホールには、1000人を超す大学院生らが参加。またホール入り口前には、9学科からそれぞれ大学院生の研究成果をまとめたパネルが展示され、来場者の関心を引いていた。

シンポジウムに先立ち、田口東理工学部長（当時）が、昨年度新設された生命科学科や、今年度に土木学科から名称変更されて生まれ変わった都市環境学科を紹介しながら、理工学部の創設から現在に至るまでの歴史を説明。続いて永井和之総長・学長が「地球規模の環境問題にどの

ように本学が取り組んでいくのか、いま考える時に来ている」などと述べ、大学として今後とも環境問題の解決に向けた研究に積極的に取り組んでいく考えを示した。

シンポジウムでは、前東京大学大学院教授で千葉工業大学惑星探査研究センターの松井孝典所長（宇宙へ地

球）科学）、中央大学研究開発機構の丹保憲仁教授（環境工学）、東京医科歯科大学大学院の佐々木成教授（腎臓内科）の三氏が講演した。

「宇宙から見た地球」と題して講演した松井氏は、宇宙からの視点として「宇宙の歴史137億年の時空スケールで考える」ことの重要性を

指摘。また文明について、「人間圏をつくって生きる生き方」と定義し、この地球が生命の惑星であり続けられるのは「あと5億年」であることを紹介し、「人間圏の未来はわれわれの意思次第である」と強調した。

続いて丹保氏は「地球環境の中の水」と題し講演。このなかで地球の水のうち淡水は約2・7%で、そのうち2・14%は極の水河であると説明。日本では一日に一人が生活に使う水の使用量が約300〜350リットルにも及ぶことを紹介したうえで、「水はメディア。資源そのものではない。上下水道を整備する前に川の水をきれいにすべきだ」と訴えた。

最後に「水と生命」と題して講演した佐々木氏は、「細胞こそが生命のもと」と述べ、人体の細胞内の塩濃度と太古の地球の海の塩濃度が同じであることを紹介した。また腎臓は心拍出量の五分の一の血流量を受け入れる器官であることや、体内物



理工学部のパネル展示を熱心に見つめる来館者

質の精密な濃度調整が可能な機能を有していることなどを説明した。

その後の質疑応答では、来場者から「人類は環境よりも先に、経済から滅ぶのではないか」といった科学を超えた質問も飛び出した。これに対し丹保氏は「これまでの経済は、環境や自然を無限のものとして発展してきた。しかし、人類圏は有限である。考えが甘かった」と指摘した。

また、日本とアメリカの科学研究の違いについても話が及び、応用研究に資金を多く配分する日本と、基礎研究を重視するアメリカの政策が比較された。これに関し、「日本は科学政策と技術政策を分けるべき」という見

解が示された。

最後に三氏から、科学を学ぶ学生に対し、「自分の人生を考えよ。いま未来を考えて行動すれば、それは実現できる」（松井氏）、「文系の頭構造を持つて、理系の勉強をすれば良い人材になれる」（丹保氏）、「やる気になればどの分野にもフロンティアは見つけられる。熱意を持つて取り組もう」（佐々木氏）とメッセージが送られた。

一方、ホール入り口前には、大学院生など若手研究者の日々の研究成果をまとめたパネルが展示された。昨年のノーベル物理学賞で話題となった物質の根源を探る素粒子論から、広大な宇宙に関する研究まで、その研究分野は多岐にわたっており、9学科を擁する理工学部の幅広い研究成果を紹介。来場者らは、パネルを眺めながら大学院生らに熱心に質問する姿がみられた。

（学生記者 小室靖明∥理工学部4年）

中央大学創立125周年記念 商学部創設100周年 記念シンポジウム

「商学部教育のこれからを考える」

中央大学創立125周年・商学部創設100周年記念シンポジウム「商学部教育のこれからを考える」(主催：商学部、共催：学員会 C-Com21 支部)が10月17日、中央大学駿河台記念館で開かれた。シンポジウムには、商学部卒業生はじめ現役の商学部生が数多く参加、パネリストと参加者との活発な意見交換を通じ、これまでの商学部教育を振り返るとともに、今後の進むべき方向について展望した。

はじめに基調講演に立った石川鉄郎商学部長は、学部教育の目標として、国際的に通用する質の高い教育を行うことを挙げた。そのために教育方針として「何を身につけたか」を重要視する考えを強調し、入試方針はじめ教育内容や大学の社会的説明責任(アカウンタビリティ)を明確化して「21世紀型市民」の育成を目指すことを挙げた。

また商学部の特徴として専門分野に応じた4つの学科(経営、会計、商業・貿易、金融)の設置学科ごと

に2つのコース(フレックス・コース、フレックスPlus・コース)の開設を挙げるとともに、学科間の垣根が低く、科目履修の自由度が大きい点を紹介した。

新たな改革の方向性については、学院方式の導入大学院教育との(タテの)連携を図り、学部教育の充実を目指す各専門分野相互間の(ヨコの)連携教育の充実を目指すことなどを掲げた。

石川商学部長の基調講演に続いて、酒井正三郎商学部教授の司会でシン

ポジウムに移った。山田治彦さん(1979年卒、公認会計士、あずさ監査法人代表社員、日本公認会計士協会常務理事)、佐藤暢晃さん(1980年卒、凸版印刷(株)金融・証券事業部長)、伊原康裕さん(1986年卒、富士火災海上保険(株)企業部長)、笠井和人さん(1990年卒、青森県県土整備部河川砂防課主幹)、マホームーさん(2002年卒、日本ミヤンマー・カルチャーセンター所長、永山堯之さん(商学部3年)の計6人が討論者となり、「商学部

教育について」それぞれの立場から考えを発表した。

山田さんは、日本公認会計士協会で会計プロフェッショナルの教育研修を行っている立場から、「学部での教養教育」の重要性を指摘し、「時間をかけて土台を体系的にやって欲しい」と強調。また「学問は動機付けが必要」との考えを示した。

佐藤さんは、「自分で考え、自分



商学部教育のこれからを語るパネリストたち

で行動できる人」が有用な人材であるとしたうえで、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、コーディネーターする能力を養って欲しいと強調。同時に「学ぶ力を刺激する教育を実践して欲しい」と提言した。

続いて、伊原さんは刊行物（商学部ガイド）にある「会社が倒産しないためにどうしたらいいか、を考えるのが商学部」との学部長メッセージを引用した。また最近、中途退職する社員が多いことが問題になっていることについて触れ、学生に対して「できるだけ早めに行きたい業種を絞って欲しい」と求めた。さらにインターンシップで実社会に触れて、職業について考える時間を持つことが重要だと指摘し、「貪欲さを持って欲しい」と強調した。

笠井さんは、「対応力、適応力のある人材が求められている」と述べ、県庁の仕事については「民間と接する機会が多く、商学部で修めた学問が役立つ場面もあることから、オンラインラウンドに学び、興味のあることは深く追求してもらいたい」とアドバイスした。

また、ミヤンマーからの留学生だったマヘーマーさんは、「留学生は余裕がないなかで勉強している。図書館の利用の仕方、履修届の出し方などわからないことが多かった」と振り返った。そのうえで、留学生

に対しては「自分から日本人の学生にどうしたらいいかを聞く方がいい」と指摘、日本人の学生に対して

は「留学生にできるだけ多く関わって欲しい」と要望。また大学には留学生に対するチューターなどのサポーター制度を設けてほしいと要望した。

在学生代表として討論に参加した永山さんは、卒業生、教職員、学生の三者が一体となって商学部を盛り上げる機会をつくりたい、と希望し

た。

このあと、「商学部教育のこれから」について来場者との質疑応答、意見交換が活発に行われた。

シンポジウムのと、会場を移して情報交換会が開かれ、参加した教員、卒業生、現役学生らがパネリストを囲み、和やかに懇談した。
（学生記者 梶原麗奈 法学部3年）

シリーズ「創立125周年に向けて」^{第4回}

125周年記念特別展 「浮世絵百華」

平木コレクションのすべて

「たばこと塩の博物館」(東京・渋谷)で 1月11日まで開催

中央大学創立125周年記念特別展「浮世絵百華 平木コレクションのすべて」(主催：学校法人中央大学、平木浮世絵美術館、たばこと塩の博物館)が11月21日、東京・渋谷区神南の「たばこと塩の博物館」を会場に開幕した。記念特別展は前期(11月21日～12月13日)と後期(12月15日～1月11日)にわかれて開催される。

平木コレクションは、実業界で活躍した平木信二氏が収集したもので、

重要文化財、重要美術品を数多く含む世界的にも有名な浮世絵コレクション

シヨんだ。今回は、浮世絵とともに、絵本を中心とした版本の優品もあ



内覧会で浮世絵の名品を鑑賞する人達

せて紹介されている。

前期は、「これぞ浮世絵！——平木コレクションの優品・名品・稀品——」と題し、重要文化財5点を含む平木コレクション選りすぐりの浮世絵を展示。後期では、「浮世絵とは何であったか——浮世絵文化史学——」をテーマに、浮世絵という文化遺産を、同時代的な視点、また文化史学・社会史的な視点から捉えなおし、その文化史的意義を再評価する。

初日の11月21日には、内覧会とレセプションが行われ、中央大学から

久野修慈理事長、永井和之総長・学長はじめ、展示会実行委員である文学部の教員らが出席。また、平木浮世絵美術館、たばこ塩の博物館からも、両館長をはじめ学芸員らが出席したほか、多くの招待客が会場を訪れた。

内覧会に引き続いて近くのホテルで開かれたレセプションでは冒頭、永井和之総長・学長が、関係者らに感謝の言葉を述べたうえで、「浮世絵を美しいと感じる感性は日本人に共通のものです」などと述べ、特別展の成功を祈念した。

続いて平木浮世絵財団理事長の岡崎洋氏、たばこ塩の博物館館長の勝浦秀夫氏が登壇。岡崎理事長が「満足の出来る展示ができた。多くの方々にコレクションの核心部分を見て、評価していただきたい」と述べると、勝浦館長は「記念展に参加できたのは、大変名誉なことだ。今回集められた品々は、江戸の浮世絵文化・



レセプションでは実行委メンバーが紹介された

印刷文化を知る上での貴重な資料。会場に何度も足を運んでいただきたい」と特別展の魅力をアピールした。このあと久野理事長が「浮世絵は将来も高い評価を受けるでしょう。中大も同じように将来高い評価を受けられるように努力していきたいと

思っています」などと述べて乾杯の音頭をとり、歓談に移った。歓談では、和やかな雰囲気の中、出席者たちが交流した。内覧会の参加者からは、「これほどの名品が一同に集まることはとても意義深いことだと思う。どの絵も質の高さ、保存状態がすばらしい」「大変立派なコレクションで非常に見応えがある」などの意見・感想が聞かれた。歓談の合間には展示会実行委員会の紹介が行われ、会を代表し佐藤光信・平木浮世絵美術館館長が挨拶。特別展を開催するまでの経緯を紹介し、「ここにある品々は日本の宝です」と強調した。最後に、中央大学管弦楽部の演奏に合わせて校歌斉唱した後、実行委員会委員長の宇野茂彦文学部教授が挨拶し、内覧会・レセプションを締めくくった。

記念特別展は、入館料が一般・大学生300円(150円)、小中高校生100円(50円)、満70歳以上は無料。カッコ内は20名以上の団体料金。開館時間は午前10時〜午後6時。休館日は毎週月曜日(ただし1月11日は開館)、12月28日〜1月4日。(学生記者 廣瀬功一 文学部2年)